自己決定理論に基づく学習動機づけと学業成績との関連（2）
—潜在曲線モデルによる検討—

○ 西村多久磨（東京大学大学院・日本学術振興会）
○ 孫 嬌（国立情報学研究所）
○ 鈴木雅之（国立情報学研究所）

問題と目的
子どもの自ら学ぶ意欲の低下という教育問題が指摘される中、心理学研究でも、これらの現象が実証的に検討されてきている（cf. 大家・藤江, 2007)。たとえば Otis et al. (2005) では、自己決定理論（Deci & Ryan, 2002）が提唱する 4つの動機づけ（内的調整：おもしろいから勉強する、同化的調整：自分のためにやるから勉強する、取り入れの調整：勉強ができないからやるから勉強する、外的調整：親に言われて勉強する）のいずれかが低下することが示されている。しかし、西村・孫井（2013）では、我が国で低下が見られるのは、内的調整と同一化的調整などの自律的動機づけだけであることが指摘されている。

このように研究観点が一貫していないことに加えて、学習動機づけの変化が学業成績の変化に関連しているかは十分に検討されていない。そこで本研究では、学習動機づけの変化のパターンと、学習動機づけの変化と学業成績の変化の関係について検討することを目的とする。

方法
本研究は、鈴木・西村・孫（2014）と同じデータを用いたものである。

調査協力者・手続き
首都圏にある公立中学校 5校に所属する中学1〜3年生 2734名（男性 1353名、女性 1380名、不明 1名）を対象に、2013年6月、9月、11月、2014年2月に実施された定期テストの1週間後に調査を行った。なお、教科として数学を想定させて質問項目への回答を求めた。

調査内容
1. 学習動機づけ
西村他（2011）が作成した自律的学習動機尺度で、4つの学習動機づけを測定する項目をそれぞれ3項目用いた（4件法）。
2. 数学成績
「あなたの学校の中で、あなたはどのくらいの成績をとっていますか」という項目に対して、5件法で回答を求めた。

表1
潜在曲線モデルの分析結果（非標準化推定値）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>1年生</th>
<th>2年生</th>
<th>3年生</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>内的_切片</td>
<td>2.44</td>
<td>2.15</td>
<td>2.12</td>
</tr>
<tr>
<td>内的_回帰</td>
<td>-0.08</td>
<td>-0.01</td>
<td>0.02</td>
</tr>
<tr>
<td>共同化_切片</td>
<td>2.97</td>
<td>2.80</td>
<td>2.81</td>
</tr>
<tr>
<td>共同化_回帰</td>
<td>0.01</td>
<td>0.03</td>
<td>0.07</td>
</tr>
<tr>
<td>取り入れ的_切片</td>
<td>2.24</td>
<td>2.20</td>
<td>2.21</td>
</tr>
<tr>
<td>取り入れ的_回帰</td>
<td>0.03</td>
<td>0.04</td>
<td>0.04</td>
</tr>
<tr>
<td>外的_切片</td>
<td>2.36</td>
<td>2.50</td>
<td>2.48</td>
</tr>
<tr>
<td>外的_回帰</td>
<td>0.08</td>
<td>0.03</td>
<td>0.03</td>
</tr>
<tr>
<td>数学成績_切片</td>
<td>2.89</td>
<td>2.77</td>
<td>2.83</td>
</tr>
<tr>
<td>数学成績_回帰</td>
<td>-0.10</td>
<td>0.02</td>
<td>0.08</td>
</tr>
</tbody>
</table>

**p<.01, p<.05**

表2
各学習動機づけと成績の切片因子・傾き因子に関する因子間相関（1年生 / 2年生 / 3年生）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>内的_切片</th>
<th>内的_回帰</th>
<th>共同化_切片</th>
<th>共同化_回帰</th>
<th>取り入れ的_切片</th>
<th>取り入れ的_回帰</th>
<th>外的_切片</th>
<th>外的_回帰</th>
</tr>
</thead>
</table>

**p<.01, p<.05**

— 669 —